

特集 女性のリーダーシップ

6-7面 草創期の日本YWCAと河井道ものがたり (後編)

The Young Women's Christian Association

YWCA

日本YWCAの使命(ミッション) イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する 世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第31総会期主題

平和を実現する人々は幸いである—マタイによる福音書5章9節

日本YWCAビジョン2016

- (1)・非核・非暴力により平和を実現する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・原発のない社会をつくる
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
(2) 女性と子どもたちの権利をまもる
(3) 若い女性のリーダーシップを養成する

4

APRIL 2016

No.731

www.ywca.or.jp

男女の格差を示す国際的な指標「世界ジェンダー格差指数」で日本は145ヶ国中101位(2015年)、世界的に見ても、日本における男女の所得格差や政治・経済分野での意思決定参画度の低さが目立ちます。女性がリーダーシップを発揮し、誰もが暮らしやすい社会に変革していくためには何が必要なのか、ジェンダー政策に詳しいジャーナリストの竹信三恵子さんに伺いました。

「女性活用小国」の日本

日本は、戦後の経済成長によってそれなりの水準の暮らしぶりを達成したにもかかわらず、女性の意思決定参画が進まなかった「女性活用小国」です。戦後、人口の半分を占める女性たちは無償の家事・育児・介護、言わば「家庭内労働・福祉」を担い、合間に低賃金労働を行ってきた。その支えで男性が長時間働いて、日本は戦後の国際競争で「勝者」となったのです。女性の無償の家庭内労働によって福祉や社会保障の費用を抑えた分、税金を経済発展や産業振興に回してきたと言えます。

80年代には、男女雇用機会均等法を制定し、女性の職域は広がりましたが、その内実は、男性並みの長時間労働に耐えられる女性だけを正社員として認めるも

女性たちの声が反映される社会をつくらう

ジャーナリスト 竹信三恵子さんに聞く



竹信 三恵子 Miekko Takenobu

profile

和光大学教授、ジャーナリスト 1953年生まれ。76年、東京大学卒、朝日新聞社入社。経済部、学芸部、編集委員兼論説委員などを歴任。ジェンダーや非正規労働者の視点から日本の労働市場の変化を報道し続け、2009年「貧困ジャーナリズム大賞」受賞。2011年から現職。著書に『女性を活用する国、しない国』(岩波ブックレット)、『家事労働ハラスメント』(岩波新書)、『ルポ 賃金差別』(ちくま新書)など。



のでした。「せつかく男女平等になったのに、女性は、意識が変わらないから「正社員をやめて非正規を希望するのだ」と言われもしました。でも、それは意識の問題ではありません。男女の賃金格差や家庭内労働の負担を考えれば、結婚後は女性がフルタイムで働かない方が合理的という判断があるから。本当は、女性も男性も、育児や介護を含む家事労働時間を確保しながら働いて、自立した生活ができる。そういう仕組みをつくっていかねければならなかったのです。男女共通で労働時間の短縮をしようとか、せめて「同一(価値)労働同一賃金」を実現しようという重点目標を掲げるべきでした。

エンパワーするNGO



「協力ありがとうございます」

- 賛助員
熊江雅子 戸田照枝 伊藤真智子
保々敬子 阿部方子 武井真美子
岩崎俊夫 村瀬さくら 田村恵美子
大谷 陽 藤井初子 赤石めぐみ
粕谷千穂 田中唯子 由良喜久子
遠藤真理 鎌原恵子 露木美奈子
清水嶋幸 本田恭子 石塚多美子
齋藤康代 乾 康子 仁木三智子
町田裕子 宋 富子 江尻美穂子
向後理恵 泉谷五十鈴 石井摩耶子
大野綾子 大野 肇 山田久美子
実生律子 三浦薫子 比企教子
皆川悦子 和田崇子
日本バプテスト同盟東京平和教会
日本基督教団聖ヶ丘教会
日本基督教団都島教会

- 高橋征一 高橋公子 仁木三智子
濱崎久子 磯村弘子 大久保生子
三好賢造 三好幸江 石井摩耶子
山上幸雄 寺沢京子 田村未知子
皆川悦子 外山真理 井上たけこ
久米 教 島崎淳子 中田加代子
齋藤佑史 田尻 拓 山上ユリ子
廣田貞子 久米淑子 山田久美子
外山 翼 三浦 毅 三浦佳子
榎沢明子 伊藤恵子 新藤総一郎
大海由嗣 田尻可納子 片石やすこ
フエリス女学院中学校・高等学校
との森アールエフ高等学校生徒・教職員一同
学校法人玉川聖学院
女子学院宗教部
ブル学院中学・高等学校
尚綱学院中学校・高等学校
活水中学・高等学校宗教部
福岡女学院中学校・高等学校宗教部
関西学院宗教活動委員会
日本キリスト教団井草教会
日本キリスト教団横浜長老教会
日本キリスト教団松山城東教会
日本キリスト教団松山城東教会
弘前YWCA 福島YWCA
松山YWCA
公益財団法人名古屋YWCA

- 災害時支援募金
(国内内外の災害被災者支援)
藤井初子 乾 康子 伊藤真智子
常葉俊子 白田治子 皆川珂菜江
中西トク子 仁木三智子
広島女学院中高等学校
日本バプテスト連盟日野神明キリスト教会
日本基督教団聖ヶ丘教会
日本キリスト教団稚内教会
日本聖公会沖浦教会宮古聖マコヤ教会
福島YWCA
(ネパール大地震被災者支援募金)
公益財団法人名古屋YWCA
(オリーブの木キャンペーン募金)
熊江雅子 齋藤喜子 伊藤真智子
藤井初子 川上 哲 田村恵美子
村瀬さくら 坂和 優 武内富貴代
田中京子 坂内義子 添野ふみ子
遠藤真理 石崎敦良 仁平のぞみ
中峠由里 外崎由里 仁平のぞみ
木村浩子 阪本和子 宋 富子
杉山晋 松山珠実
美唄めぐみ幼稚園
大阪YWCA大宮保育園

- 福島YWCA 松山YWCA
静岡YWCA
一般財団法人仙台YWCA
一般財団法人平塚YWCA
(変革の力募金)
東京YWCAまきは保育園
福島YWCA
東日本大震災被災者支援募金
熊江雅子 齋藤喜子 伊藤真智子
寺島順子 戸田照枝 武内富貴代
山本鉄子 村瀬さくら 中西トク子
浦田伸子 深田光代 由良喜久子
藤井初子 水野淳子 仁木三智子
村田幾代 遠藤真理 佐々木由涼
中峠由里 木村浩子 仁平のぞみ
大野泰宏 常葉俊子 泉谷五十鈴
大野綾子 大笹香織 山田久美子
保野尚子 本山陽子 高田八重子
比企教子 丹野信子 松川ゆか
サビーネ・クルーガー
地球のこくらぶ・善隣館
シオン幼稚園
社会福祉法人高倉ひかり保育園
リトル学院中学・高等学校

- 大森ルーテル教会付属幼稚園
日本福音ルーテル大森教会
小豆島バプテスト教会
聖ミカエル教会
日本基督教団ひびりが丘教会
姫路顕栄教会日曜学校
日本基督教団松沢教会婦人会
日本キリスト教団西千葉教会
日本キリスト教団白鷺教会
捜真バプテスト教会女性会
0422キリスト教合同プログラム実行委員
広島YWCAクリスマスついで有志
福島YWCA 湘南YWCA
熊本YWCA 静岡YWCA
公益財団法人福岡YWCA
一般財団法人平塚YWCA
一般財団法人長野YWCA
匿名
世界YWCA総会派遣募金
世界YWCA総会派遣募金箱より
(2015年12月16日〜2016年2月15日現在 敬称略)

「元気になる会議」
ホワイトボード・ミーティングのすすめかた!
ちよん せいこ/著
解放出版社/発行 1600円+税



街や人の元気を応援するファシリテーター、ちよんせいこさんが提唱する「ホワイトボード・ミーティング(WBM)」。本書には、WBMを進行する時に必要なスキルとマインドがぎゅっと詰まっている。WBMの方法はこうだ。ファシリテーター(進行役)が参加者の年齢や社会的立場に関係なく、各人の発言や発言にならない吹きを拾い、ホワ

イトボードに書き記し、オープンクエスチョン(※で多くの情報を引出し、発言を掘り下げて「発散」→「収束」→「活用」と繰り返して会議のゴールに到達する。意見を可視化することで話がぶれずに進み、書くことで「認めあう関係」を育み、すべての参加者が「元気になる」会議となる。前提となるのは、会議が参加者それぞれ心の体力を温めるエンパワメントされる場であること。否定されてばかりいると笑顔が消えていくように、心の体力が冷えていく。そうではなく参加者のだれもが対等で大切な存在と認めあひ、会議の場で心の体力を温める「ミニミニセッション」を築いていく。筆者は、何より「ファシリテーションは人権尊重のスキルでもある」と説く。そのための練習

問題も載っている。何度でも練習し、実践し、仲間と気持ちよく目標に向かってほしい。また「元気が出る会議」の重要な要素として開始、終了時間を守ることが示されている。時間を大切にすることは人を大切にすること。全員が揃わなくても始め、終わらない時は参加者と相談してどうするか決める。遅れて来てもホワイトボードを見ればそれまでの全ての発言が把握できる。福岡YWCAも数年前から取り入れている。それは参加者の貴重な時間を有効に使うため、そして自分たちの話し合いが受益者の幸せに繋がるように、との思いからだ。各地でWBMの勉強会が開催されているので、一度ご参加してはいかがですか。福岡YWCA総幹事 野崎千代

※「はい、いいえ」「AかBか」などの択一による回答範囲を設けずに、相手が自由に返答できる質問

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 Fax.03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp
編集発行人 石井摩耶子/偶数月1日発行

旬な情報発信しています | メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp | お名前を送ってください / フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp 無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。

「女性で輝く社会」から「女性が輝く社会」へ

いま安倍政権は「女性が輝く社会」をスローガンに掲げていますが、発想としては、女性も働かせることで経済成長を実現しようというだけ。女性の発言力を高めようということではない。現在、働く女性の6割は非正規で、賃金は正規の半分です。経済力も限定され、家事労働も担っているがゆえに時間もない。そうした女性たちの希望が反映されるような政策もないまま、女性に無償の家庭内労働と低賃金労働をせよとせよ。ことで日本の国際競争力を高めるといふ考え方は変わっていない。使い捨て労働の考えから抜け出していないのです。

たとえば、女性が働くためには保育や介護制度の充実が不可欠ですが、資格を持った保育士や介護士は潜在的に少なくないのに、現場での労働力は不足していると言われます。賃金保障が労働の割に合わないからです。税金をこうした福祉分野に回して、女性の自立した経済力を高め、新しい納税者を育てるとか、女性が意思決定に少なくとも一定以上の割合で参画できるようになどといった視点が、今の日本には欠けています。

女性たちが働きかけてクオータ制を実現した北欧

女性が一定の割合で政治や企業

は、60年代のはじめに人口減少と好況による人手不足で女性労働力が求められたのが始まりでした。女性たち自身が、介護や育児といった家庭内の無償労働を軽くしなければ安心して働きに出られないと訴え始めたのです。介護施設や保育施設の充実が不可欠でしたが、それを税金で賄うためには、税の使い道を決める国会などに、女性たちの要望を反映する女性議員を送り込む必要があります。税によって福祉産業をつくり上げ、女性も賃金労働者として雇われる仕組みを整えることで、女性が税や年金を負担できる働き手となり、国や地方の税収も増え、さらに福祉を充実させたのです。

女性ネットワークを活用して大きなうねりを

日本では閣僚に3人の女性が入っていますが、人数が少なすぎて多数派の男性のルールに適應できる人ばかりが登用されています。少数だから、男性が自分たちに都合のいい女性を選べるわけで、女性が議席の少なくとも4割を占めるようになれば、選んではいられなくなる。その数字を達成することで初めて多様な立場の女性の意見が反映されるのです。

最近、女性団体や有識者によって「JG83ネットワーク」が旗揚げされました。日本の国会では定数717人のうち女性議員（JG）は83人しかいないので、それを全議員の少なくとも3割から4割

決定の場に参画する「クオータ（割り当て）制」。この制度を取り入れているどの国の例を見ても、男性が親切に女性の活躍できる環境をつくってくれたわけではありせん。40%のクオータ制を実現しているノルウェーでは、女性たちが、まず女性党をつくり、既存の政党が女性の働きやすい社会を実現しないのであれば、女性は皆女性党に投票するという圧力をかけました。男女平等度の高いことで知られるスウェーデンでも、きっかけ



に増やすことを目標にする全国的な女性のネットワークです。今夏の参院選に向けて、候補者にアンケートをとり、原発・安保法制・非正規雇用などの項目についてチェックリストを作っています。一見、原発や安保法制は直接女性の問題ではないようですが、これらは大いに関連した問題です。戦前の日本は、植民地を含む国内外の富や人的資源を富国強兵のために使い、女性はそのための道具でした。富や人的資源を戦争のために使う考え方は、女性や社会の弱者のために使うという考え方は絶対相容れられないのです。その危険性をはらむ安保法制はやめて、少ない資源を国民の生活をよくするために使うという候補者を選べるように、「JG83ネットワーク」は活動しています。こうした女性の権利を守るために活動する全国的なネットワークを通して、情報を共有し、問題解決への同じ重点目標を掲げて取り組むことが必要です。参院選は非常に大切です。

少子高齢化は男女平等社会へのチャンス

これまでの日本経済は輸出型でした。人件費のコストをなるべく安くして輸出を増やすことで利益を上げてきた。そのためには、使い捨てできるように、人口は多い方がよい。言ってみれば戦争と同じく、人間の使い捨てをすることで国を豊かにする発想法でこの国は発展してきたのです。これからは少子高齢化で、少ない人間をどう大切に活かすのかという発想に変えていかなくてはならないのに、国が外国人労働力の解禁を言い出したのも、これまでの考え方を継続しようとしているから。国際化のためではなく、日本人に代わる使い捨ての安い労働力のためです。外国人労働者は3年限定の国際派遣となっており、日本に定着して自分の条件を良くするために闘うことができない仕組みになっている。これでは外国人はもとより、女性の状況も良くなりよう

種

イエスは、「わたしに触れたのはだれか」と言われた。女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。イエスは言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

(ルカによる福音書8章45、47、48節)

1955年12月アラバマ州モンゴメリーの市営バスの車内に運転手の罵声が響きます。「白人に席を譲れ。さもないと警官を呼ぶぞ」。勤め帰りの女性は座ったまま「お好きなように」と答えました。駆けつけた警官に逮捕された彼女の名前はローザ・パークス。彼女の抵抗がバスボイコットにつながり、やがて公民権運動へと発展します。

一人の女性の「結果を恐れない行為」が歴史を動かした。このことを覚える時、聖書に登場する名も無き女性の物語が思い浮かびます。その女性は貧しく、長年病を患い、人々から忌み嫌われていました。彼女は病が癒されると信じて、群衆に紛れ込んでイエスの衣に触れます。「わたしに触れたのはだれか」と探すイエスの熱情に、恐れながらも進み出て、群衆の前にも関わらず、身の上で起きた一部始終を話します。彼女の行いに、イエスは「あなたの信仰があなたを救った」と讃えて「安心して行きなさい」と送り出しました。

この女性の中に信仰を見たイエスは、ローザの「結果を恐れない」態度の中にも「信仰」を見られたことでしょう。公民権運動から60年経つ今もお「白人至上主義」が根強い米国で、結果を恐れずに声をあげ続ける人たちがいます。その人たちの中こそ、復活のイエスがともに歩いておられます。主の復活を喜び祝うイースターの季節、世界中に響き渡るその声と一緒に耳を傾けましょう。「安心して行きなさい。」

景山 恭子
米国聖公会ニューヨーク教区

がない。「お前の代わりはいくらでもいる」と言われたら、がまんして家事育児を続けながら低賃金で働くしかないのです。

でも実は、少子高齢化は女性にとってチャンスでもあります。どの先進国も、少子高齢化で労働人口が減る状況を利用して、女性がのびのびと働けるような社会の仕組みをつくっていききました。人口が少ないからみんな貧乏かと言うと、そんなことはない。人口が少なくても、人々が豊かに幸せに生きられる方法は何かと、考え方を変えていくべきです。そのために求められているのが、リーダーシップです。リーダーシップとは、今の社会の問題を、多様な立場の人の状況からとらえ、それを解決するために具体的にどの点から変えなくてはならないのか、きちんと把握できること。そして一人ではできない変革のために、たくさんの人の力をつなげていくことです。

インタビュー・構成 編集部



プレゼント

竹信三恵子さん著
岩波ブックレット
『女性を活用する国、しない国』

3名様

Present



岩波書店
発行
520円+税

竹信さんの話をさらに詳しく知りたい人に薦めたい一冊。豊富なデータと取材により、日本の「男女平等」の実態を検証し、女性も男性も幸福になれる社会を展望する。抽選で3名にプレゼント。

- 応募方法
ハガキに下記の必要事項を記入のうえご応募ください。
※ご記入いただいた個人情報や賞品の発送にのみ使用させていただきます
- 必要事項
①住所 ②氏名 ③電話番号
④本誌に対するご感想
- 応募締め切り
2016年5月14日(土)当日消印有効
- 当選発表
厳正な抽選のうえ、賞品の発送をもって発表にかえさせていただきます
- 宛先
〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台1-8-11
東京YWCA会館302号室
日本YWCA「YWCA」4月号
プレゼント係

ダイバシティ(多様性)からインクルーシブネス(包容性)へ 「アイデンティティと会員制度」に関する私の展望

京都YWCA職員 堀部 碧

2015
世界YWCA総会
スピーチより

大学時代に京都YWCAでボランティアを始め、2010年から会員、2013年から職員をしています。私の京都YWCAでの役割は、ボランティアからプロジェクトマネージャー、そして職員になってからはコーディネーターへと変化しました。ノンクリスチャンの私を受け入れ、エンパワメントされる多くの機会を与えてくれた京都YWCAには大変感謝しています。

しかし、これまでの私のYWCA運動との関わりの中で、本当に私たちは「YWCA (Young Women's Christian Association)」なのか、という問いに直面しています。日本という超少子高齢化社会で私たちは、会員の高齢化と、運動の担い手となる若者の減少に苦しんでいます。一度はYWCAを訪れたものの、ここを居場所と思えず離れていった若者も少なからずいました。若者にとって、私自身を含む年上の会員や職員は「権力」を持つ存在であり、彼ら彼女らが自由にYWCA運動を担うには多くの弊害があるからです。しかし、私自身はYWCAに集う若者との時間の中で、彼ら彼女らの社会を変えたいという思いに何度も励まされてきました。若者たちこそがYWCAの未来であり、希望である実感しています。

YWCAで活動する中において、さまざまな立場から、他者への不満を言う人々があります。「職員は私たちが尊重していない」と言う会員、「会員が無茶なことを言う」という悩みを抱える職員。「YWCAの『C』が蔑ろにされてい

る」と言うクリスチャン会員、「私たちは肩身が狭い」と言うノンクリスチャン会員。どちらの言い分が正しいかを判断するつもりはありません。しかし私は、「YWCA運動」の主役は会員であると信じています。社会を変革しようと主体的に動く会員のみなさんの力には無限の可能性がります。

私がここで提案したいのは、世代や立場の違いをこえて、運動を担う一人ひとりが互いの「声」を聴くということです。YWCAは、最も小さくされている声に耳を傾ける団体であると思います。であるならば、私たちの日常から、共に働く人々にもそれを実践すべきだと思います。

対話の土壌をつくり、声を聴き続けること。それはYWCAの先輩たちが実践してきたことでもあります。私自身、先輩たちに真剣に話を聴いてもらい、具体的なアクションづくりをサポートしてもらったことが、今日までの私の歩みにつながっています。

私はこの世界総会で東北アジアの若者たちと出会い、同じ時間を楽しく過ごしましたが、これは一昔前には考えられないことだったと聞きます。日本が犯した過去の歴史を反省し、被害国の人々との対話を続けた日本のYWCAの先輩たちの働きが可能にしたことなのです。

YWCAに集う多様な人々が、互いの「声」を聴き、真にインクルーシブな運動にしていくことで、より平和で公正な社会を創っていくのだと信じています。

と、そしてチャレンジャーであり続ける生き方だ。例えば、中国YWCAの人たちと現地を巡る「南京を考える旅」や、韓国YWCAの若者たちと交流する「日韓ユースカンファレンス」に参加して、諸先輩方が、どのような小さな事柄も少数の声もながしるにせず、常に言葉の一つ一つを真面目に考え、ていねいに中国や韓国の人々とのプログラムに臨む

姿を目の当たりにした。そして、私もそれを見習って行動していた。しかし、社会に出てみると、多くの場合は大きなもののためには小さなものに目をつぶることが多く、何事に対しても真面目であること、真摯であり続けることがいかに困難かを知った。

また、YWCAでは、一人ひとりが大切にされる社会をつくるために、チャレンジャーでいられるかを問われてきたように感じる。これは当時から、十分に達成することができず悩むことはあった。しかし、今は、「長い物に巻かれろ」という流れがより強く、少数派になることを恐れず多数派に対して声をあげ、立ち向かうことは大変難しいことであると痛感させられている。

振り返ると、YWCAでの学びを生かすには、葛藤ばかりの毎日を過ごして見逃してはダメだと思ふことには、たとえ理解者がいなくても声をあげていきたい。どれだけできるか自信はないが、YWCAで学んだことを実践につなげていきたい。

次号では「南京を考える旅2016」レポートのほか、この夏開催予定の「日韓ユースカンファレンス」へようしまを考慮する旅」募集についてお知らせします。

職業は高校の教員ですが、名古屋YWCAでの活動を続ける一方で、子どもの社会参画を推進する「特定非営利活動法人こどもNPO」に理事として関わっています。私にとって社会とつながるこうした活動はライフワークであり、自分を磨く機会でもあります。「こども



日本YWCAでは、国境を越えて若い世代が交流して学びあう実践的プログラムを実施しています

「こどもNPO」で大切にしていることは、子どもやユースの主体性を尊重することです。大人たちは子どもたち一人ひとりの声に耳を傾け、共に活動を進めています。YWCAの先輩たちが私たちが若者を信頼し、考えを尊重してくれたように、今度は私が、子どもやユースを信頼してサポートしていきます。

私は現在、群馬県の私立学校に教員として勤務をして3年になる。社会人として最初の職場でいまだに迷いが多々あるが、そんなとき指針となるのが、大学から大学院まで6年間、YWCAでの活動を通して多くの先輩方から学んだことである。それは何事に対しても真面目であるこ

小さなことにも真摯に向き合うチャレンジャーであり続けたい

福岡YWCA 樋口さやか

先輩たちから学んだものを 地域の子どもやユースに還元

名古屋YWCA 新倉春美

NPO」では、子どもやユースと一緒に子どもの権利条約の理念を普及させるた

めのフォーラムを開催したり、若者を対象とした社会的な課題に関する啓発活動に関わったりしています。私

若い世代に まかれた種

特集
女性の
リーダーシップ

YWCAはビジョンの1つに「若い女性のリーダーシップ養成」を掲げている。YWCAが目指すリーダーシップとは、女性や少女が主体的に社会のさまざまな課題を解決するために、人と人をつないでいくチカラだ。女性たちがそれぞれの場でこのチカラを発揮すれば、誰もが暮らしやすい社会を創りだせる。リーダーシップは、異なる背景を持つ多様な人々が出会い、受け入れ合い、共に働くことを通して育まれていくものだ。YWCAの多彩なプログラムのなかで若い参加者たちは、互いに対話を重ね、違いを認め合いながら信頼関係を築き、共通の課題の解決に向けて新しい一歩を踏みだしていく。かつてYWCAのプログラムに参加した若者の今に光を当てた。



YWCAの先



第4回幹事養成科の卒業生8人と記念撮影をする河井道(前列右)。この数ヵ月後、道は辞表を提出。卒業生たちはこの後、神戸や京都、横浜のYWCAで活躍した(1925年)



総幹事として最後の修養会の夕べの祈り。かつて留学先のアメリカで体験した修養会でも同様の夕べの祈禱会がもたれた。そのとき道は、日本の少女たちのために自分を置いて欲しいと祈っていたのだった(1925年)



日本が女性差別撤廃条約を批准し、男女雇用機会均等法を制定してから30年、今年4

月1日には女性活躍推進法も施行されたが、現実には男女平等等は遅々として進んでいない。また、昨年には安全保障関連法が可決され、再び平和が脅かされようとしている。今こそYWCAは、聖書に裏打ちされた「汝の光を輝かせ」を指針とするべきである。

協力関係を築くリーダーシップ

草創期YWCAの礎を築いた河井道のリーダーシップは、信仰を抜きにしては考えられない。それは、神の被造物として一人ひとりのかけがえない個性を輝かすこと、その手助けをすることである。同時に開拓者精神をもって大胆に困難に立ち向かうことであり、女性たちの日常の生活の中に真の協力和協働の関係を築くことであった。YWCAの魅力は何といっても、個性豊かで多種多様な女性たちが同じ目的のために協働するところにある。一人の力は限られていても、何人かが集まり、心と力を合わせる時に思いがけない働きが生まれるのだ。「わたしの経験を生かし、これに生命と意義をもたせるのは個人的なふれあい、つまり人間的な要素なのである」と語った河井道は、一人ひとりを大切に、貧しい人、苦難の中にある人々のためにいつも身を挺して働いた。私たちは河井道の精神と行動を受け継ぎ、共に歩んでいきたい。

恵泉女学園大学名誉教授 石井摩耶子



汝の光を輝かせ

草創期の日本YWCAと河井道ものがたり

草創期の日本YWCAには、広岡浅子をはじめ近代日本をリードした数多くの女性たちが参加していた。彼女たちを引きつけた魅力はどこにあったのか。その答えを探るため、日本人初の総幹事としてYWCAの礎を築いた河井道の歩みに光をあてるシリーズの後編。人生の集大成として女子教育の新しい地平を切り拓いた道が、現代の私たちに投げかけるメッセージを、日本YWCA代表理事で、河井道を研究している石井摩耶子さんとともに読み解く。

広岡浅子と河井道

1910年代の日本YWCAの活動は、広岡浅子の存在を抜きには語れない。大阪YWCAの創設に尽力しただけでなく、会の財政を支え、若い会員達を励まし続けた。浅子は60歳で癌を患い、病後、大阪基督教会の宮川経輝牧師から聖書を学んでいた

が、1911年のYWCA夏期修養会に参加し、講師の山室軍平と出会い、彼を訪ねて教えを請い、やがてクリスマスに大阪基督教会で受洗した。以後、暑さを厭わず夏期修養会には毎年欠かさず参加し、何回も講師を務め、熱烈な信仰心で女性の生き方を語った。ある年に、日本の女性はプロバニティ(プライド)「傲慢」+バニティ(虚栄)で、浅子の造語)だと厳しく戒めたことを、

を大切に思い、求められると機関誌に寄稿し、インタビューにも応じた。道のYWCAへの思いは、第二次世界大戦直後、占領軍の総司令官マッカーサーの副官フェラーズが遺した文書からも窺える。1945年9月、彼は旧知の河井道に面談し、日本人の天皇観について意見を求めた。その時の道の発言を彼が簡条書きしたメモの最後に「YWCAを支援してほしい」との一文があったのだ。河井道は、戦後の日本を平和で人権が尊重される国として再建するために

は女性の力が不可欠であり、それにはYWCAの活動がどんなに大事かを、マッカーサーに伝えたかったのだと思われる。「汝の光を輝かせ」――。マタイによる福音書5章18節のイエスのこの言葉を、河井道は恵泉女学園の生徒たちに贈った。神の前にはすべての人々は等しく神の子であり、一人ひとりの人権は誰も侵すことのできないもの。だから、自分を粗末にしてはならず、神に与えられた個性を輝かす人になれと奨めた。それは、他者の尊厳を大切にすることでもあると教えた。また同じ福音書の5章13節には「地の塩になれ」とある。塩は特に目立つこともなく地にしみ込んで世の腐敗を正す。光を輝かすということとは、塩になることと表裏一体でなくてはならない。この聖書の言葉に込めた河井道のメッセージは生徒のみならず、すべての女性に投げかけられているといえよう。

汝の光を輝かせ 地の塩になれ

戦争の悲惨さを肌で感じる

1914年6月、第一次世界大戦が勃発した。すでに日露戦争の犠牲者を目の当たりにし、バルカン戦争の悲惨な状況を憂えていた河井道は、「女子青年界」9月号に巻頭言「病院と戦争」を寄稿した。戦争ほど愚かで非文明的なものはないと断じ、軍事費を教育に充てるべきだと言い、「剣は元來臆病者が持つべきもの。真の平和を主張しその主義の為に倒れる者こそ、本当の勇者であると私共は確信致します」と宣言

女性の力で平和を実現するために

道は、YWCAとは何をする団体なのかを模索した草創期に、開拓者精神をもって新たな道を拓き、女性の自立のための社会教育団体としての骨格をつくり上げていった。

日本YWCA創設20周年に当たる1925年の秋、総幹事を14年務めた道はYWCAに辞表を提出、翌年秋に委員会に受理されると、前から温めていた理想の学校(恵泉女学園)をつくる準備に邁進した。キリスト教教育と並行して、国際的勉強を具体的な教科科目に据えた。そこには「戦争は、女性が世界情勢に関心をもつま



夏期修養会に3年連続で参加した広岡浅子(左)。右は日本YWCA初代総幹事マクドナルド(1913年)

やかな雰囲気へと変わっていった。敵国同士だったドイツとフランスのYWCA代表が駆け寄り手を握り合うところを目撃した道は、深く感動したと記している。女性たちが国境を越えて協力し合い平和を実現することの大切さを体中で受け止めたのであった。

したのである。道の平和への願いは、大戦終了1年半後、スイスで開かれた世界YWCA委員会に出席して一層強まった。まだ戦争の爪痕は生々しく、緊張の中で始まった会議は、指導者たちの一致への願いと粘り強い努力で、和